

『金平』

江戸初期、明暦～寛文(1655-73)頃に金平浄瑠璃という人形浄瑠璃が流行した。坂田金時の子に金平という架空の人物を設定し、その武勇譚を中心にした物語を語った。江戸の浄瑠璃は、元和のころから、杉山七郎左衛門・薩摩浄雲らの太夫によって隆盛の基礎がつくられた。金平浄瑠璃はこの浄雲の弟子の和泉太夫(のちの桜井丹波少掾)とその子長太夫(二代目和泉太夫)によって新しく語り出され、その流行は江戸の地だけではなく、上方にまで及んで、伊藤出羽掾・虎屋源太夫らの太夫もこれを語っている。

和泉太夫は、金平浄瑠璃の内容にふさわしい豪快な語り口で、二尺ばかりの鉄棒で拍子を取りつつ、張り物の岩をたたき割るという荒々しい演出で、その子長太夫も金平を地で行くような痛快な性行の持主で人気を呼んだ。

平安時代中期の武将源頼光の臣四天王の子供たち、坂田金平・渡辺竹綱・碓氷定景・卜部季春の四人と、一人武者平井保昌の子鬼同(童)丸とが、金平を中心に超人的な活躍をする武勇譚。頼光すでに亡く、その弟頼信の子頼義が子四天王らの臣とともに都を守護している時代、佞人の讒言や反逆者の出現によって、都の秩序は危機におちいり、頼義一党は都落ちの悲運にあうが、金平ら四天王の活躍によって、賊徒は平定され、平和は再び回復されるというのが大体の筋であった。二百編近い現存作品の構想はほとんど大同小異であり、こうした作品が歓迎されたことは主人公金平の魅力による点が大きい。短気で知謀には乏しいが、正義感の強い豪快なこの人物は戦国の余風を残した江戸の地にこたに歓迎された。作者としては岡清兵衛・岡五郎兵衛・師倍らが知られており、なかでも、岡清兵衛には、『うちのひめきり』『頼光跡目論』らの傑作が残されている。元禄(1688-1704)頃衰滅したが、その後の時代の浄瑠璃の構想や歌舞伎の市川団十郎の荒事に大きな影響を与えた。

本学所蔵の『金平』は、今回の調査では関係する資料を発見することはできなかった。右上の人物は、四天王の一人碓氷定景、その手前中央が金平である。左手にはムカデがおり、一見、金平と闘っているようであるが、よく見ると口に鬼神をくわえている。金平はその鬼神に切りかかっており、「きん平つのきる所(金平角切る所)」という説明がついている。ムカデの横の説明には、「びしやもん下どうおく王へ(毘沙門外道をくわえ)」とある。ムカデは毘沙門天の使いとして知られているので、あるいは毘沙門天の加護により、金平に加勢しているのであろう。

[参考文献]

“金平浄瑠璃”，国史大辞典，JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com>，(参照 2014-10-25)